

震災エコツアー 報告書



震災エコツアー報告書

【目次】

はじめに……3

第1章 岩手・宮城内陸地震「震災エコツアー」の実例……4

第2章 震災エコツアーの評価……7

第3章 「震災エコツアー」という復興支援活動と災害教育……11



荒砥沢ダム崩壊現場。テレビを通して見るのとは違い、目の前に広がる破壊の痕には圧倒される

はじめに

2008年6月14日、有史以来最大の地盤崩壊（荒砥沢ダム上流部＝日本の地質100選選定／2009）を起こした岩手・宮城内陸地震が発生した。山間地に大きな被害をもたらしたこの地震は、阪神淡路大震災や中越地震、中越沖地震などのような市街地での大規模な被害はなかったために、局所集中で甚大な被害をこうむった山間の開拓地住民にとって、その被災状況がなかなか伝わらないもどかしさ、悔しさが生まれた。

日本エコツーリズムセンターでは、山から強制退去させられた被災住民たちの一次避難所で災害ボランティアセンターを運営していたくりこま高原自然学校の佐々木豊志氏（日本エコツーリズムセンター世話人）の活動への緊急支援として、救済資金の募金とともに、この地震の実像を出来るだけ世の中に伝えていく活動を開始した。

「くりこま高原被災情報2008」全27報 <http://www.eco-tour.jp/ecotabi/modules/wordpress/?author=192>

被災現地と全国をつなぐこの一連の活動を通して、日本エコツーリズムセンターでは次の目標として、被災地に人々を案内する「震災エコツアー」を開始した。一般市民に被災状況を目の当たりに見てもらい、被災住民やボランティアとの対話を通して、被災が非日常でありながら身近な出来事であること、被災者と非被災者とを隔てる壁は本来何もないことなどを実感として捉えてもらうことで、将来いつ起きるかもしれない「自分の災害」への準備を促すことをねらいとした。また、この震災エコツアーによって、被災地周辺地域の商店街や宿泊施設などが受けている風評などの2次的被害への支援も行うことが出来た。

「震災エコツアー」はこれまで5回実施して、多くの参加者に現地をあるいてもらった。

本報告書はこのドキュメントであり、いつか必ず来る「自分の災害」に向けた災害教育のテキストでもある。

第1章 岩手・宮城内陸地震「震災エコツアー」の実例

岩手・宮城内陸地震で実際に被災した地元の自然学校「くりこま高原自然学校」をベースに自然学校本拠地がある耕英地区はじめ、疎開先となっているくりこま地区を支援するための「震災(復興応援)エコツアー」。

1.要項

- 対象：一般、2～3時間程度の徒歩が出来る方（小学生以上）各回約15名
- 参加費用：12,000円
（新幹線交通費別、宿泊は無料、食材費は込み、参加費は全額支援金募金へ充当）
- 集合解散：東北新幹線 「くりこま高原」駅
- 時間：1泊2日
- 宿泊：くりこま高原自然学校 松倉分校（一般民家で男女別相部屋）

2.スケジュール例

1日目	
10:45	東北新幹線 くりこま高原駅集合⇒移動
11:20	総合支所で許可証申請（参加者本人の要申請）
12:00	昼食（地元特産そばだんご）
13:00	栗駒六日町ツアー（仮設住宅、避難所、馬場通り、六日町通り）
	町から見た震災や「幸せになる祭り」などについて商店街の方からヒアリング
15:30	山体崩壊の現場、荒砥沢ダムなど視察
17:00	温泉入浴
18:30	夕食
19:30	山体崩壊の目撃者である「さくらの湯」社長より話を聞く。
	引き続きスライドレクチャー
20:30	交流会 耕英地区復興の会の大場会長より話を聞く

2日目	
7:30	朝食
9:00	疎開地松倉地区視察
11:00	耕英地区ゲート通過
	くりこま高原自然学校、耕英地区崩落現場など視察
13:00	昼食（数又養魚場 数又貞男氏より話を聞く）
15:30	くりこま高原駅到着 解散

3. 実施実績

第1回:2008年7月20～21日

- お茶碗プロジェクト見学（栗駒、花山地区）
- 移動中、地滑りで杉の森が移動した現場を見学
- 荒砥沢ダム見学
- さくらの湯社長のレクチャー（地震直後の崩落の話）
- 震災レクチャー・スライドショー
- 文字地区、佐野社宅見学
- 花山地区避難所見学



阪神淡路大震災の経験者が、被災した方に無料でお茶碗を配布する「お茶碗プロジェクト」を実施

第2回:8月23～24日

- 耕英地区内視察、くりこま高原自然学校見学・ボランティア作業
- 冷沢崩落現場、駒ノ湯見学
- ファイト栗原子どもまつり見学
- 震災レクチャー・スライドショー
- 移動中、地滑りで杉の森が移動した現場を見学
- 荒砥沢ダム見学
- NPO（くりこま応援の会）視察



夜は被災や復興の状況について、スライドレクチャーや、地元の方から直接話を伺う

*エコツアーカフェ TOKYO：9月3日（東京での報告会）

第3回:10月8～9日

- 数又養殖所見学
- 耕英地区内視察、くりこま高原自然学校見学・ボランティア作業
- 冷沢崩落現場、オートキャンプ場、駒ノ湯見学
- 震災レクチャー・スライドショー
- 移動中、地滑りで杉の森が移動した現場を見学
- 荒砥沢ダム見学（展望台より）
- 国立花山青少年自然の家被害見学
- 仮設住宅見学



荒砥沢ダム付近の地滑り現場。歩いていくと道路が突然なくなる。アスファルトがないむき出しの状態



大きな岩が飛ぶ！ 転がったのではない

第4回:2009年5月23~24日

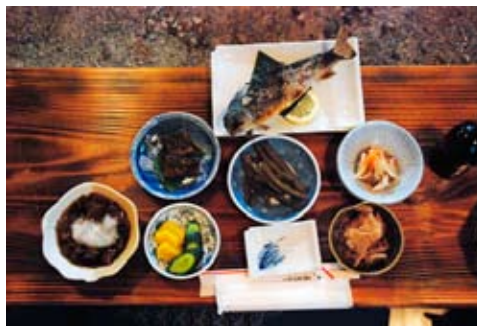
- 栗駒支所にて耕英地区へ入る許可申請
- 避難所だった伝創館見学
- 栗駒六日町商店街見学・ヒアリング
- 移動中、地滑りで杉の森が移動した場所が片付けられてしまった現場を見学
- 荒砥沢ダム見学（展望台より）
- さくらの湯社長のレクチャー（地震直後の崩落の話）
- 震災レクチャー・スライドショー
- 耕英地区内視察、くりこま高原自然学校見学・ボランティア作業
- 数又養殖所にて昼食
- 入院中の佐々木豊志氏お見舞い

第5回:10月11~12日

- 栗駒支所にて耕英地区へ入る許可申請
- 荒砥沢ダム見学
- 栗駒六日町商店街見学
- さくらの湯社長のレクチャー（地震直後の崩落の話）
- 震災レクチャー・スライドショー
- 松倉地区視察
- 耕英地区崩落現場など視察
- くりこま高原自然学校視察
- 数又養殖所にて昼食



商店街でのヒアリング。地震の直接被害は少ないが、商売への影響は否めない



避難中、数又養殖場ではイワナのケアができず全滅も危惧された。今では、イワナづくしのお昼ご飯をだしてくれる

第2章 震災エコツアーの評価

1. 概要

毎回、被災地の状況によってツアー内容を変更してきた。

初回はまた道ができておらず耕英地区に入ることはできなかった。地震から1カ月しかたっておらず、被害についての話題が多かった。ツアー2日目は避難所が閉鎖された日だった。

2回目では、復興へ道を歩み出していた。地震で中止となっていた子ども祭りが実施され、物理的な復興だけでなく、文化・精神面での復興も始まっていた。

3回目では、耕英地区で数又養殖場を見学した。被災後、地区に入ることができず心配されていたイワナは無事に成長していた。また、被害が一番ひどかったと思われるオートキャンプ場も見学し、あらためて地震の威力を知る。

年が明けた4回目では、このツアーの直前に、住民票を持った人には耕英地区への滞在許可が出たが、一般の参加者へは個別の許可証が必要となり、支所で手続きをした。また、初めて栗駒の町中を見学し、商店街の方からも話を聞く。耕英地区への道のりも工事が盛んに行われていた。

5回目では、荒砥沢ダムが復旧という名のもとに、重機が入り崩落箇所が崩され、平にされていた。貴重な自然遺産として日本の地質100選にも選ばれていたのだが、全く違う景色になってしまっていた。



日本でも最大級の崩落がおきた荒砥沢ダム。2008年秋

震災エコツアーは参加者への影響はもちろんだが、情報を発信し続ける上でも重要な取り組みだと考えている。被災地の様子、住民の復興への取り組み、そしてうつり変わって行くさまざまな物事。1年半かけて実施してきて、見えてくるものは大きい。



駒ノ湯の跡地。慰霊碑の前で手をあわせ、2本の寄り添った木を探す。「生きのびるといいね」と願っていたが、枯れてしまった。季節ごとに自然は移ろい、崩落しても生き続けている木々も紅葉をむかえる



荒砥沢ダム崩落箇所には、重機が入り、貴重な自然遺産が失われた。2009年秋

2. 参加者からの声

- 人生観が変わる体験。地震のない地域に住みたいと普通は思うが、日本にはそんな場所はない。でも、そういう国で生きていく力が人にはある。日本中、世界中の人に見てもらうべき。(大学客員教授・男性)
- 地球の上にいる！ということを実感した。自然の変遷は摂理。そこで知恵をつけ、生きているのが人間。(ライター・男性)
- 自然の力をまざまざと見せてもらった。耕英の開拓の精神で復興して欲しい。(主婦)
- 耕英地区に入り、人のエネルギーの強さ、開墾の時の思いを感じた。これは、幼い子どもでも、誰が来ても感じ取れるものだと思う。(NGO・男性)
- お金を出してでも体験しなきゃいけないものだったと思った。参加して本当に良かった。(自営業・男性)
- 貴重な体験だった。この経験をどう今後活かしたらいいか、まだわからないが考えていきたい。(公務員・女性)
- 遠方なので交通費が高くなるため、来るのを迷っていたが、来て良かった。崩壊の現場を見て、圧倒された。地域の普通の人の話を聞けたのがよかった。個人では被災した方に話しかけるのは難しいが、地元の人が案内してくれて話を聞けて本当によかった。(公務員=防災担当・男性)

3. 地元からの声

- 自分が被災するまで、被災のニュースを見ても、大変だなと思っていただけ。今は違う。名古屋が洪水の被害にあった時は、DHCの水があったので、その水を送ってあげた。
被災の現場を見てもらいたい。見たいっていう人は貴重。親戚にも何であんな怖い所に帰るのって言われた。見てわかってもらって、支援をしてもらえたらと思う。神戸の人も、被災者の声はなかなか届かない、と言っていた。栗原市に住んでいても見ようとしない。みんな行ってはいけないと思っている。でも、現場が一番の情報力を持っている。
法律とは被災者に冷たいものです。守ってくれると思っていたけど、全壊以外の家には、固定資産税がかかるというのが現実。まだまだ復興までは長い道のりだ。(耕英地区住民)
- やっぱり見てもらうのはいい。耕英地区があんな状態になっているとは思わなかったが、2次的・3次的被害もあり、商売や文化にも影響がある。実際に来てもらえるのは大事だと思っている。(地元商店の方)

4. 震災エコツアーの効果

(1) 観光面、地場産業面での風評被害を受けている地域を旅行者が訪れることにより、地元で経済効果をもたらすことができる。

地元商店街を訪れ地域の物を購入したり、温泉施設を利用するなど、自然学校だけでなく地域自体にお金をおとす仕組みをつくれた。

耕英地区の食事処では、誰もが自由に入れなかったために、観光客が来られない状況にある。そういう場所を利用することは、精神的にも資金的にも支援になる。

(2) 地域の住民への元気づけ。参加者との交流により全国の人が応援していることが実感できる。それにより、被災した状況を前向きにとらえられるようになる。

商店や温泉を利用するだけでなくヒアリングを行うことで、遠方から復興支援に人が訪れていることを、多くの地元の人が認識できる仕組みをとった。

(3) 参加者への災害教育（被災者の状況、支援者の活動をスライドなどで見せる）

参加者からの声にもあるように、参加者への災害教育の効果は大変高いものがある。時間がたつと忘れてしまう被災地のことを改めて考える機会となるのはもちろんのこと、実際に現場に足を運び自分の目で見ることによってわかる自然災害の威力を実感してもらえた。

また、災害を災いとしてとらえるのではなく、地球のエネルギー、自然の摂理、としての視野を持てるようになる。自然をコントロールするのではなく、先人達のように、自然とともに暮らす生き方の知恵を考えるきっかけとなっている。

さらには、自然にだけフォーカスするのではなく、そこに住む人の営みについても知る、考えることができ、災害や被災地をこれまでとは違った様々な視点で見ることができるようになっている。

(4) 新しいエコツーリズムの資源発掘として、自然災害地の景観、災害造形物などを活かす。エコツアー実施の事例をつくり、運営の仕組みをつくることにより、災害地が迅速に復興を目指すために活動ができるようになる。

① 貴重な遺産の保護：震災エコツアーを実施し続けるなど、貴重な自然資源であることを表明してきた結果、荒砥沢ダムの崩落箇所が日本の地質100選に選定される。

② 地元自治体への影響：当初、震災エコツアーに極めて慎重だった栗原市自身が被災の状況を知ってもらうためのツアーを実施した。

③ ジオツーリズムへの発展の可能性：ユネスコが「ジオパーク」の認定を始めており、今後ジオツーリズムへの発展が望まれている。くりこま高原自然学校が主催（日本エコツーリズムセンター協力）で、ジオツーリズムを始めよう、と題したシンポジウムも実施された。また、震災エコツアーへ子どもの参加があったことにより、楽しむツアーとしての可能性も広がった。

第3章 「震災エコツアー」という復興支援活動と災害教育

広瀬敏通

NPO法人日本エコツーリズムセンター代表理事

1.被災地に行こう！

震災(復興応援)エコツアー

史上最大の地盤崩壊が起きた岩手・宮城内陸地震の現場で『震災エコツアー』が実施された。参加者は『被災地にツアーとして入るのは大丈夫なの？』とおずおず申し込んだという人も。1泊2日の行程を終えて車で解散するときには、『ぜひ次には子どもをつれて参加したい』『もっと多くの人に同じ体験をしてほしい』と口々に湧き上がる思いを話した。被災地に入るというのはどんな意味があり、彼らは何を見たんだろう。

宮城側の被災地は山間部の開拓地に集中した。ズタズタに寸断された道路を使わずにヘリで避難してきたものの、そのまま地区に帰れず、年1回の収穫期を迎えた特産イチゴやイワナの養殖場は無人のまま腐熟し、稚魚の大量死を迎えていた。厳しい開拓の暮らしに2重にのしかかった地区の生活や地場産業の被害。

ツアー参加者は大崩壊地を目の当たりにして、幾人もの証言者から話を聞いた。メディアでは報道されない地域の問題、行政の無理解。その中で藁をも掴むように苦闘する被災住民やくりこま高原自然学校の面々。震災の仕組みや被災時の話などを聞いた後に『どうしたらいいのか』ツアー参加者の議論は深夜まで及んだ。

報道で見聞きする平板な情報とは異なる、さまざまな思いを乗せた肉声との出会いは、本当の情報を得た実感を参加者に与えてくれた。

ボランティアを断らない

4年前の中越地震の際、筆者（広瀬敏通／日本エコツーリズムセンター代表理事）は震度7を記録した川口町でボランティアセンター（以下、VC）を開設し活動していた。

その中越地震では長岡、小千谷、十日町など各地区にもVCが開設されたが、これらのVCが半月後には押し寄せるボランティアでパンクして、のきなみ受け入れを中止したのに対し、川口町は最後まで、日／1000人に近いボランティアを受け入れ続けた。これは、覚悟をもってはるばる駆けつけてくれたボランティアの個々人がこの体験を下に災害大国日本に生きる個人として、生き方を変えうる機会だと私と仲間たちが考えたからだ。ボランティアが実際の活動には多すぎて参加できなくとも、欠かさずに続けた日4回の全員ミーティングは、少数の担当者だけの会議にせず、一日限りのボランティアでもみんな参加でき、さらに活動時間帯である昼にVC前の広場を埋めていた人々に対して、「川口町の現状とVCの活動」に関するタイムリーな情報を伝えてきた。これによって、直接現場で活動する機会をもてなかった人々も川口町の貴重な情報を生で得ることが出来、自分の地元に戻ってからも川口町の状況を伝えることも出来、ボランティアとしての自覚と意識を持ち続けられると各所から評価されてきた。

私は70年代末のカンボジア内戦時に現地で長く救援の活動に従事してきた。帰国後設立したホールアース自然学校では、さまざまな災害救援の現場にいち早く立って、人々がそれぞれの力で救援や復興に関わることができるような仕組みづくりに注力してきた。それと同時に災害現場が極めて優れた教育力を持つことにも注目してきた。

災害大国日本

火山国の日本の風土は変化に富む美しい森や湿原、温泉に恵まれ、普段はその恩恵にあずかっている。しかし一方、ひとたび災害が発生すると、甚大な被害をもたらす。この被災地には、通常、ボランティアとしてしか入ることが出来ず、一般人がなんとか役に立ちたいと思っても、近づくことも適わない。

日本列島は火山噴火や地震、台風、地滑りなど、世界でも稀な規模の『災害大国』として知られている。防災白書平成21年版によると、世界中で発生したマグニチュード6以上の巨大地震のじつに20.8%が地球上の国土の0.25%のわが国に集中している。

また、地震の原因のひとつでもある活断層は約2000箇所があり、今回の被災地となった栗原市も岩手・宮城内陸地震の震源地域に近接しており、過去に巨大地震を引き起こした活断層型の地震のひとつである。

このように、日本は災害大国であるにもかかわらず、多くの日本人は災害現場からほんの少し離れただけで、悲惨な被災地とは無縁に立ち居振る舞い、想像力は圧倒的に欠如している。

現場で学ぶ災害教育

災害現場を身近に肌身で理解できるか否かが、いざという災害時での対処に大きく関係してくると私は考える。それには毎年のように発生している災害現場を「教場」にした学びがとても効果的な『災害教育』になるはずだ。悲惨な災害現場を見学したり話を聞いたりすることには、倫理的な疑問も起こるだろうが、それでもなお私は幾多の経験から、災害教育こそは現場でなければならず、現場だからこそできると考える。安全面での配慮さえつけば、小中学生をバスで現地に入れて、VCなどを見学させ、被災住民やボランティア自身から災害の状況と災害地支援の話しを聞かせる。こうした活動は行政担当者に対しては災害時の効果的な官民協働による救援体制を、企業にはその組織力を生かした救援のケーススタディを提供できるだろう。

これまで、わが国で行われてきたのはおもに被害を未然に軽減する防災教育であり、災害発生時のダイナ

防災と災害教育

『防災』とは『減災』

- ① 災害が起きないようにする
- ② 発生した際に被害を最小限に留める

- >> 都市、住居の耐震化
- >> ライフラインの整備
- >> 自主防災のネットワーク化

『災害教育』とは、災害発生時の人間の行動に焦点をあわせた教育活動のこと。

- ① 被災者の立場で出来ることすべきこと
- ② ボランティアとして出来ることすべきこと
- ③ 被災者は、災害時に自分自身の生命を守り、被災地での協働しうる生活技術を持ち、自身の役割を果たすイメージを持つ

- >> 救命活動の実践
- >> 被災生活での効果的な対処
- >> 生活再建までの各段階の技術

ミックでカオスのような状況下での生き抜く能力を培う教育は体系的には取り組まれてこなかった。しかし、前述のような災害教育が実施されればその効果はきわめて高いだろう。

被災地は特別の聖地ではないし、被災地というだけで危険なレッドゾーンでもない。そこには被災しつとも生き、暮らしている人々がいる。その人々と直に接し、自分ごととして災害を捉え返すことは、自分や身近な人を救う力にもなるだろう。知らん顔せずに“被災地に行こう！”。

2.新しい地域資源《ジオツーリズム》をはじめよう

筆者は1980年にカンボジア内戦下のタイ国境にできた難民キャンプで救援NGOとして活動し、のちに政府派遣の医療協力事業のチームコーディネーターとなった。そのときともに仕事した方々を中心に、82年に国際緊急援助隊を結成した縁で、その後の国内で発生した災害現場の多くに救援チームとして関わって来た。95年のいわゆる阪神淡路大震災では野外教育や自然学校の仲間呼びかけて発生2日後に動き、第1陣として現地入りしたのだが、その同行者がくりこま高原自然学校をのちに設立した佐々木豊志氏である。被害の甚大だった地区の中心であった東灘小学校に活動拠点をつくり、以後75日間に亘って800人に及んだ避難所の運営や子どもたちのケアに当たったが、今回の震災ではこのときの体験がたいへん役に立ったと佐々木氏は語っている。

栗駒山を震源とする地震は震源に近い荒砥沢ダムの上流部で大崩壊を引き起こし、その結果、高さ150mに達する崩落崖を生じさせた。地震での死者行方不明者23名を出したが、市街地が震源から離れていたことでマグニチュードの割には人的被害と建物被害は局地的にとどまった。災害は被災者、被災地にとっては人生を狂わせるほどの甚大な影響を及ぼすが、一方で、変化に富んだ地形、地質や、湖沼、滝、温泉などが副産物となり、災害大国日本の国土は自然造詣物の豊かさ、美しさでは世界に知られてきた。災害に絶望することなく、逞しく逆境を武器に変えてきた日本人は、これを観光資源としてきただけでなく、火山灰土を生かした農地の造成や森林資源の活用なども積極的に行ってきた。

こうした系譜で見れば、今回の震災による荒砥沢上流部での大崩落で生じた特異な地形現象は、日本の国土を形作る現在の地形の発生現場に立ち会うような価値のある出来事であり、それを被災地である旧栗駒町や耕英地区住民が20年50年先に有益に活かせる機会をもたらしたと考えることが出来る。

筆者は自らが委員であった『日本の地質100選』<http://www.web-gis.jp/geo100/index.html>の2009年5月の選考委員会で、11ヶ月前に発生した岩手・宮城内陸地震による荒砥沢ダム上流部の大崩落地帯を日本の地質100選に推薦した。審査では災害直後ということで慎重意見もあったが、いま、その価値を公におこななければ災害復旧事業や開発によって永遠にその資源性を失いかねないという委員会の総意で選定された。また、同時に国内ではユネスコが支援する『ジオパーク』運動の日本における初の選考が行われるタイミングに重なった。

ジオパークはこうした災害などによって生じた特異な地質地形が地域の資源として持続可能な形で観光や教育的な活用に生かされることを目的としており、栗原市もジオパークを市の取り組みとして謳っている。

その端緒がようやく目処がついたと安堵したのもつかの間、林野庁による復旧工事がなんと、現場の大崩落核心部にまで手を伸ばし始めているということが分かった。災害には復旧というセオリーは高度成長期以降の日本では例外なく行われてきたものだが、復旧事業は安全面、公益面で緊急性を持つものに限られるべきであり、荒砥沢ダム上流部のように集落がない土地においては、災害ではなく自然現象として捉えるべきである。

筆者は長年、エコツーリズムの専門家として国や自治体の計画づくりなどに携わってきたが、前述したように荒砥沢大崩落の特異な地形現象はジオパークとして充分の資源性を有するものであり、これとって産業的な基盤のない耕英地区はもちろん、旧栗駒町にくらす人々にとっても、この地形現象を守って後世に伝えていく営みは同時に、数十年のちの地元経済の柱になる可能性が高いであろう。ぜひとも地域住民、研究者、ツーリズム専門家などが力を合わせて、この類稀なる荒砥沢の大崩落地形の保全と活用に取り組むことを期待したいし、筆者の属する日本エコツーリズムセンターでも全面的な支援を行っていきたい。

震災エコツアー報告書

2009年12月1日発行

著者 NPO法人日本エコツーリズムセンター

発行者 広瀬敏通

発行所 NPO法人日本エコツーリズムセンター

〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-8-13

TEL:03-6457-3952 FAX:03-6457-3951

www.ecotourism-center.jp